2021年4月

新年度がスタートしました！3月の最高気温が20℃を超え、桜も例年より早く咲きましたね。最低気温と最高気温の差が激しい時期ですから、体調管理には気をつけましょうね。新型コロナウイルスも早く収束してくれることを願うばかりです。昨年度よりも明るいニュースが多い年度となりますように……☆

さて、今回ご紹介する本は、**『フクロウはだれの名を呼ぶ』ジーン・クレイグヘッド・ジョージ著 千葉茂樹訳 あすなろ書房 2001** です。タイトルにフクロウの名がある通り、マダラフクロウ(ニシアメリカフクロウ)が登場します。ナチュラリストの一家で育ち、自然を題材にした作品を多く発表している著者は、この本で絶滅危機の問題や環境問題を分かりやすく提示し、読者に人間と自然の共生について考えさせてくれています。

アメリカでは絶滅危惧種に関する条例があり、絶滅のおそれのあるマダラフクロウを保護するため、森林伐採が禁止されました。その影響で、主人公のお父さんは木こりとしての職を失ってしまい、林業の仕事を失った人と、保護派と対立する場面がでてきます。一方、フクロウを憎んでいたはずの主人公は、フクロウの子どもを発見して家に持ち帰り、家族でフクロウを育てることにします。そして、フクロウの子どもを育るうちに、愛情が芽生え、保護派の人たちの考えに歩みよろうとするのです。それにしても、フクロウの赤ちゃんを人が育てるのは、食欲旺盛で夜行性なのでかなり大変です。自然環境が壊されると、食べ物が減ってしまい、エサを集めるのに苦労してしまいます。子育て中の親であればなおさらです。

また、この問題は林業だけでなく、漁師にも影響が出るということも知ることができます。主人公の友達のお父さんも漁師の仕事を失ってしまったお話が出てきます。川にはもうほとんどサケが上がってこないという話で、主人公の友達は「父さんがいうには、海の漁師が刺し網で取りすぎてるからなんじゃないかって。それに、内陸で木を切りすぎたのも原因なんじゃないかっていってる。木を切りすぎると土が流されて、川が泥だらけになっちゃうんだ。そうなると、魚の卵がちっ息して、魚はいなくなるってわけさ」と理由を説明します。漁師が失業してしまうと、缶詰会社・運送会社・スーパーマーケット……と色んなところに影響を及ぼすことになり、森林伐採の問題の深さを感じることができます。

現存する動物が絶滅してしまったら、復活することは難しいでしょう。経済も大切ですが、種の保存を考えると、やはり、そこに棲む動物を尊重し、配慮しながらの人間の生活の営みが重要であることを改めて感じることができます。砂漠化が原因ともいわれている黄砂の観測日の増加、温暖化など、身近に環境が悪化していることが感じられます。環境問題を至急解決しなければ、さまざまなところに悪影響がでてきます。自分に何ができるか今一度考えてみませんか？